

〈資料紹介〉 実相院蔵『壬生二品集』

一 書誌

縦二一・九センチ、横一五・六センチ。上下巻二冊。双葉列帖装。桐箱表蓋に直接「壬生二品集 全部」と直接墨書されている。また、表蓋の裏側に「衆方論義聖教／何通申上置哉／夫其比日論度進上／申候云々」と墨書された箋が貼り付けられている。

上巻、表紙に「壬生二品集上」と打ち付け書きがされている。内題は「家隆卿集上」。奥書には、「八宗僊／校合了／**伏見** 甚春」とある。また、冒頭側の遊紙に「墨付九十四枚」と墨付の丁数が記されている。

下巻、表紙に「壬生二品集下」と打ち付け書きがされている。内題は「家隆卿集上」。奥書には、「八宗僊／**伏見** 甚春」とある。また、冒頭側の遊紙に「墨付七十七枚」と墨付の丁数が記さ

れている。

上下巻とも一面九行書き、校本で、異本との校合に基づく書入が見られる。^①

二 諸本

『壬生二品集』は、藤原家隆の家集である。一般的には『壬二集』の名で知られている。その他、『玉吟集』や『従二位』家隆卿集とも呼ばれ、『國書総目録』によると、三五本の諸本の存在が確認できる。

^②久保田淳氏は、独自に調査された三四本の諸本について分類された。本文系統はおよそ次のような三系統に分けられる。

(1) 古本系 A類 高松宮家蔵五帖鎌倉時代写本『玉吟集』

初撰本系統

櫛 井 亜 依

宮内庁書陵部藏鎌倉時代古鈔本

〔從二位家隆卿集〕

宮内庁書陵部藏写本『壬二集』

愛知県立大学藏写本『玉吟集』

(2) 広本系 C類 蓬左文庫藏室町末期写本『玉吟集』

増補本系統 愛知教育大学藏写本『玉吟集』

石川県図書館藏李花亭文庫本写本

〔玉吟集〕

神宮文庫藏古鈔本『玉吟集』(中・下伝存)

架蔵福田秀一氏旧藏写本

刈谷図書館藏写本『壬二集』

流布六家集板本『壬二集』

〔玉吟集〕(中伝存)

井上宗雄氏藏写本『玉吟集』

架蔵二条家旧藏写本『玉吟集』(下伝存)

(3) 六家集本系 E類 宮内庁書陵部藏保己一識語写本『玉吟集』

増補後欠落本系統 京都大学図書館藏六家集写本『玉吟集』

久保田氏によると、各系統はそれぞれ次のような特徴をもつとされる。

天理図書館藏六家集写本『玉吟集』

東京教育大学藏六家集本写本『玉吟集』

(1) 古本系は、(3)六家集本系の欠く、「百首和歌 初心」、「詠百首和歌 仙洞初度」、「百首和歌 入道前撰政治家初度」、「百首和歌

架蔵柏林社本三帖写本『玉吟集』

宮内庁書陵部藏智仁親王筆『玉吟集』

内裏名所」、「百首和歌」と文治三年の百首和歌二編を有するが、(3)に見られる「二百首和歌」と文治三年の百首和歌二編を欠く。これは、

神宮文庫藏六家集写本『玉吟集』

高松宮家藏『玉吟集』に代表され、寛元三年に九条前内大臣基家が家隆の歌草をもとに私的に編纂した系統である。

三手文庫藏写本『玉吟集』

関西大学図書館藏六家集本写本

(3)六家集本系は、六家集板本所収『壬二集』に代表され、近年

〔家隆卿家集〕

国会図書館上野支部藏写本『壬二集』

大倉山精神文化研究所写本『壬二集』

まで壬生集の流布本的地位を占めている。これは前掲の五編を欠き、文治三年の百首和歌二編と、二百首和歌を有する。さらに、(1)と共通する百首和歌の配列も、かなり異なっている。

(2)広本系は、(1)、(3)の内容を合わせ持つもので、蓬左文庫

蔵室町末期写本『玉吟集』に代表される。この三系統の中で最も所収歌数が多い。

さらに、久保田氏は、所収内容とその配列から、諸本の派生について、次のように位置づけられている。

B類 A類（古本系）を増補する際、詠出年次順に配列されるよう考慮したもの。あるいはC類（広本系）のように詠出年次を乱す形で増補したものを正したものを。

蓬左文庫蔵写本『壬生二品集』

C類 C類（広本系）のような三巻仕立てのものが、上巻だけ遊離独立したもの。

天理図書館蔵大永書写『玉吟集』

樋口芳麻呂氏蔵写本『玉吟集』

D類 E類（六家集本系）が成立したあとに、それをA類（古本系）・B類などによって増補したもの。

宮内庁書陵部蔵六家集写本『玉吟集』

東京大学国文学研究蔵蔵津軽家本

十市遠忠筆『壬生二品家集』

鳥原市立図書館松平文庫蔵写本『玉吟集』

D類 C類のC類よりの分岐と同様の経過を辿り派生したもの。

架蔵九条旧家蔵写本『壬生二品集』

F類 完本の前後が散逸したものを、D類のように他本によって補うことをせず伝写されていくうち、それだけで完結した本のようになったもの。

天理図書館蔵乾元奥書写本『家隆卿集』

陽明文庫蔵六家集写本『壬二集』

G類 B・C類のような増補本から、定数歌については、任意に書き抜き寄せ集めたもの。

宮内庁書陵部蔵写本『初心百首』

以後、この分類に従って、実相院蔵本の特徴と位置づけについて考察していきたい。

三 実相院蔵本の歌群配列

まず、歌群の配列順序について久保田氏の示された主な三系統と実相院蔵本を比較したい。各伝本の示す標題をもつて比較表を作成した【表A】。表題は、古本系は高松宮家蔵『玉吟集』（『私家集大成』第三卷所収）、六家集本系は六家集板本所収『壬二集』（『校註国歌大系』第十一卷所収）、広本系は蓬左文庫蔵室町末期写本『玉吟集』（『新編国歌大観』第三卷所収）を参考にし、括弧内の数字は実相院蔵本に基づく配列順を表し、各伝本の所収内容と対応するものに付した。なお、同一の歌群には同じ番号を付した。

【表A】

	実相院蔵本		六家集本系	広本系
百首和歌 自餘准之	大僧正四季百首春夏秋冬	百首和歌 初心	百首 六百番歌合	初心百首 堀河院百首題
百首和歌	為家卿家会	百首和歌 後度	千五百番歌	後度百首 題同上
百首和歌	洞院撰政家	百首和歌 六百番歌合度	百首和歌 堀河百首	殷富門院大輔百首 文治三年春于時 侍從兼越中守從五位上
秋部		詠百首和歌 洞院初度	百首和歌 大僧正四季百首	後京極撰政家百首 六百番歌合是也
冬部		詠百首和歌 千五百番歌合度	詠百首和歌 文治三年 合點入集	院百首 正治一年
百首和歌		百首和歌 入道前撰政家初度	詠百首和歌 文治三年十一月	院百首 千五百番歌合是也、建仁元年
詠百首和歌	前内大臣家内、百首	百首和歌 内裏名所	詠二百首和歌 書本雖二百別題同故 私集之次歌建久八年七月二十九日歌 也建久歌與初歌同歌多故略之畢合點 入集歌云々	光明峰寺入道撰政家百首
春		百首和歌 仙洞結句御百首	百首和歌 為家卿家會	順徳院名所百首 建保三年、于時宮 内卿正四位下
夏部		百首和歌 大僧正四季百首	百首和歌 擬作	院百首 建保四年、于時宮内卿從三位 正月五日叙之
		百首和歌 為家卿家会	百首和歌 洞院撰政家	百首 文治三年十一月
		百首和歌	詠百首和歌 九條前内大臣内々百首	二百首和歌 日本二百首居雖各別書 之題同私集之 次歌建久八年七月廿 九日歌也、建久歌与初歌 多同故略 之
		百首和歌 洞院撰政家	五十首和歌 守覺法親王會	大僧正四季百首
		詠百首和歌 前内大臣家内、百首	五十首和歌 老若歌合	為家卿家百首

この表からみると、実相院蔵本は異本である可能性が高い。まず、所収内容について、実相院蔵本に所収されている歌群は、どの系統とも共有するものであり、これだけではどの系統に属するかは分からない。また、百首歌・部類歌等の歌群の配列について、実相院蔵本はどの系統とも異っている。つまり、どれか特定の系統の諸本から一部分だけ抄出したとか、あるいは、当初揃っていたものが一部分だけが残り、あとは欠落したとも考えにくい。よって、先の代表的な三系統のどれにも属さないとされる。

ここで注目すべきは、F類である。久保田氏の分類を適用すると、F類と、実相院蔵本は完全に同じ百首歌・部類歌の所収項目を持つということが分かる。今仮に、F類に属する天理図書館蔵乾元奥書写本及び陽明文庫蔵六家集写本、実相院蔵本とを歌群配列において比較すると次の【表B】のようになる。所収項目の下の括弧内の数字は、実相院蔵本に基づく配列の順を表し、天理図書館蔵乾元奥書写本の所収項目と対応するものに付した。ただし、陽明文庫蔵六家集写本は、標題が書かれていない歌群があるため、その場合、歌群の内容を確認した上で対応する数字を付し、その歌群の第一首を挙げた。

所収する項目は、【表B】のように一致しつつ、異なりもみせている。すなわち、実相院蔵本は、初めから、久保田氏の分類でいう

F類の系統と同様の内容を持つ、現在の形態であった可能性が高い。

つまり、実相院蔵本は、独自の配列を有する伝本として際立っている。久保田氏は、「順序の混乱は百首歌の始めに見られるのであって、『為家卿家百首』等百首四篇、及びそれ以下の定数歌の配列はA—F各類ともすべて一致してゐる」と指摘されているが、同じ項目を持つ実相院蔵本と天理図書館蔵乾元奥書写本、陽明文庫蔵六家集写本とは、その配列順序が大きく異なる。代表的な三系統と久保田氏が挙げたF類の二本のどれも、①②⑥③⑦⑧⑨④⑤となり、実相院蔵本の所収項目に該当するものだけを見ても、実相院蔵本のような部立の配列順序のものは見られない。ただし、実相院蔵本には、③の項目「百首和歌 洞院撰政治家」と書いた下に、「此百首下巻ある也」、⑥「百首和歌」と書いた下に「此百首上巻 為家卿の『補入一家の』百首のつきにある也」、⑦「詠百首和歌 前内大臣家内、百首」と書いた下に「此百首上局の五首つ、の題の次に入る也」と書き入れされている。これらの注の通りに配列を並べると、①②⑥③⑦⑧⑨④⑤が連続することになり、天理図書館蔵本（応永一六年書写）や陽明文庫蔵六家集写本の配列に近くなるが、この一文がどの段階で、どの系統の伝本との校合によって書かれたものかは推定できない。

【表B】

実相院蔵本		天理図書館蔵乾元奥書写本		陽明文庫蔵本	
百首和歌	大僧正四季百首 春夏秋冬自餘准之	大僧正四季百首 百首和哥 神祇春夏秋冬 自餘	百首和哥 大僧正四季百首 神祇春夏秋冬 自餘	①	①
百首和歌	為家卿家會	百首和哥 為家卿家會	たをやめのはるたつけふの衣よりはひそめたる 花の色哉	②	②
百首和歌	洞院撰政家	百首和哥	百首和哥	③	③
秋部		百首和哥 洞院撰政家	つくはねのぬくはまゆのきぬよりも霞のころも はるいそくらし	④	④
冬部		詠百首和哥 前内大臣家會	よしの山また白露（見セ消チーユキ）は消なくに かすみもはるもけふやたつらん	⑤	⑦
百首和歌		春	春	⑥	⑧
詠百首和歌	前内大臣家内、百首	夏部	夏部	⑦	⑨
春		秋部	秋部	⑧	④
夏部		冬部	冬部	⑨	⑤

四 実相院蔵本の本文

実相院蔵本の特筆すべき特徴として、先に示した配列の順序の他に、その本文及び書き入れを指摘したい。今回は、主な三系統の先に挙げたそれぞれの代表的な三本と、天理図書館蔵乾元奥書写本、

陽明文庫蔵六家集写本の本文と比較した結果について述べる。

他の本文に見られなかった独自本文を全て挙げておく。なお、翻刻にあたっては、できるかぎり伝本の書写の様態をそのままの形で残すことをめざすことにした。そのため、旧漢字は新漢字に改めることをせず、異体字もできるかぎりそのままに残す。なお、誤写と思われる場合においても、そのままとしておいた。また、実相院蔵本の独自本文については二重傍線を付した。その箇所が傍線で示

した傍書や見せ消ちと重なっている箇所については、二重傍線を優先することにした。

〈上巻〉

- ・はるの日はおほかた空のかすむより「くれゆくそらの色のさ」〔傍書―ヒ〕（朱で塗り潰されている）ひし〔傍書―さ〕（朱見せ消チ）き（4ウ）
- ・しら露もふかき太山の卯花は「身をおもひしる名にやある」〔見せ消チ―さく〕らむ（13オ）
- ・はなはみな弥生のすゑにうつろひて「春をやおくるかへるかりかね」〔見せ消チ―うくひすのこゑ〕（16ウ）
- ・はしたかのとかへる山といつるより「ひかりもしるき秣のよの月」（19オ）
- ・おきつとり〔傍書―風イ〕あはれゆく夜は、みしまえの「たまえのあし間しめてなく也」〔傍書―あしまをしめてなく千鳥哉〕（20ウ）
- ・たくひとて我すむ宿のかへにおふる「みなしこ草もあはれいくほと」〔見せ消チ―つまで〕（25オ）
- ・五月雨はわたりもとをみいつみ川「い」〔傍書―ヒ〕こ〔補入―ま〕山みえすくもりか、れる（28ウ）
- ・きよたきの瀬、の白浪うち〔見せ消チ―いとより〕なやみ〔傍書

〈資料紹介〉実相院蔵『壬生三品集』

- ―よるや浪イ〕むすふこほりはとくる日そなき（31ウ）
- ・おほよとのまつのちきりはふりはとも〔見せ消チ―ふりぬれと〕「いまもかはらすかへるなみかな」（34ウ）
- ・それもよもまれにあふ〔見せ消チ―うつ〕夜の音はせし「いはほ、なてしあまのはころも」（42オ）
- ・ほにいて、をはなかもとになく麻は「（45オ）おもひかさぬ」〔見せ消チ―な〕る草の名やうき（45ウ）
- ・したもみちかつちる山のゆふ〔補入―し〕くれの「の」を見せ消チ」ぬれてや〔補入―ひとり〕麻のひとり〔見せ消チ〕なくらん（49ウ）
- ・心ありて〔見せ消チ―てに〕おらはやおらんゆふつくひ「さすやおくらのみね」〔傍書―山イ〕のもみちは（52オ）
- ・ひさかたの月のさかり〔見せ消チ―かつら〕の花さかり「いとほぬ空に秋かせそふく」（58ウ）
- ・秋のよは月のひかりもすみよしの「いく」〔見せ消チ―て〕みの、〔見せ消チ―は〕まのあり明の月〔傍書―空イ〕（58ウ）
- ・古郷にたれかなかめて〔見せ消チ―む〕ねぬよ〔見せ消チ―な〕はの「なかきよちきるいそ」〔見せ消チ―け〕の月影（59オ）
- ・あ〔見せ消チ―か〕すか山おとろのみちもなかたえぬ「身をうちはしの秋のゆふくれ」（61ウ）

・松〔見セ消チー杜〕間月〕まとも〔見セ消チーり〕すむもし〔見

セ消チーり〕のすかのねかなきよに〔見セ消チーの〕〕あかすう
つろふ月の影かな (63オ)

・焔の〔見セ消チー長〕夜のいこまおろしやさむからむ〕あきしの

〔補入一の〕里にころもうつなり (65ウ)

・山河のいはせのりのもみちはや〕かせよりさきもかくる白浪

〔訂正一しからみ〕 (67オ)

・こす棹のしつくも色もかはりけり〕もみちにおつるうちの川せは

〔見セ消チー長〕 (71オ)

・山かつの木〔見セ消チー夜の〕間のかけ〔見セ消チーせ〕やこり

つ〔見セ消チーぬ〕らむ〕あけはつぬれは〔見セ消チーと〕ころ

もうつなり (71オ)

・草の原〔見セ消チー葉は〕くる〔見セ消チーもと〕よりあととはな

けれどとも〕なをあらましの庭のしらす雪 (76ウ)

・おもひ出る人の袖もやこほるらん〕なれしみゆる〔見セ消チー

き〕の志賀のふる〔右見セ消チーはま／左傍書―濱イ〕道(84ウ)

・たか、みをあけはさ、のにみたれつ、〕かさしのたまとあられち

〔見セ消チーふ〕るらし〕〔見セ消チーん〕 (88オ)

・わたつうみのたまもの上にふる雪は〕やかてきえゆきあわかとそ

な〔見セ消チーみ〕る (89オ)

〈下巻〉

・さひしきはおなし籬にをく露の〔見セ消チーも〕ひとつ色なるや
まとなてしこ (5ウ)

・あらたまのとしのいくたひ〕〔見セ消チーとせ〕けふ暮て〕そら

の人の身につもるらん (13オ)

・山人のむかしのあま〕〔見セ消チーと〕の朝ほらけ〕霞を分てふれ

るしらす雪 (18オ)

・みやこ人はいまはとへかし松のとに〕まつのあらしもふきかける

〔見セ消チーよはる〕なり (18ウ)

・ゆく月もきりたち〔傍書―行人も夜わたり〕くれて〕〔見セ消チー

すて、〕曇夜の〕みねのかけはし春雨そふる (19オ)

・わたつうみの〕〔見セ消チーに〕月もいてたる湊川〕あくるもまつ

る〔見セ消チーな〕はるうの舟人 (19オ)

・かへるさのみねとふつらにさそはれて〕たにの澤田をかりそたつ

〔見セ消チーち〕ぬる (19ウ)

・たをやめのうちたれかみの玉〕〔見セ消チー花〕かつら〕あけほの

かけてにほふ春風 (20オ)

・まつ人のくもるゆふへ〕〔見セ消チーちきり〕もある物を〕ゆふく

れあさき花の色かな (20オ)

・みしか夜のなをうらみてそなかめまし〕〔見セ消チーつる〕〕夏の

中は秋の月影

(21ウ)

・人は世にしみつは夏にしらね共^{||} すみなれにける山の下陰(22オ)

・名もしるし雲も一村か、りけり^{||} たかゆふくれの秋の山さ^{||} (見セ消チーも)と

消チーも

(23ウ)

・秋ふかき谷のいほりの^{||} (見セ消チーを)あくかれて^{||} ひとりも峯に月をみるかな

(24ウ)

・はしたかのきりふのをかの竹の露を^{||} をふさのす、^{||} (傍書ーとイ)みかく月哉

(24ウ)

・たつた山峯のもみちのちらぬまは^{||} そこにそみつの秋は見えけり^{||} (見セ消チーる)

(25ウ)

・散つもるもみちふみ分我宿の^{||} するより外に問ふ人そなき^{||} (見セ消チーもなし)

(26オ)

・我袖はくるれと^{||} (見セ消チーは)露ももる山の^{||} まつのは分^{||} (見セ消チーかけ)て下もみちつ、

(29オ)

・ましかね^{||} (見セ消チーわひ)ておもひたえにし秋の野^{||} (見セ消チー夜)に^{||} たかあかつきのしきのはねかき

(29オ)

・くれはつる年の別もなけかれず^{||} わか^{||} (見セ消チーす)れし人にならひにしかは

(29ウ)

・君かよふ^{||} (見セ消チーに)雲ふきはらへ天つ風^{||} こえて帰らんとまの関山

(30オ)

・影たけてさてや、みなんみくさゐる^{||} (小書ー本マ、)よるへの

川となるらん^{||} (見セ消チー水はすみかはるとも)

(30オ)

・ゆふくれは鐘のひ、きを吹きそへて^{||} あらしの山をおくつる松風

・晩^{||} 神祇^{||} 神山のむ月の中は月さえて^{||} とりのはつねにみとひら

(傍書ーら)くなり

(31ウ)

・ふるほどそきえずはありとも桜花^{||} 庭に色なる^{||} (見セ消チーき)花のあわ雪

(34オ)

・あまのはら雲のあなたの浮雲^{||} (見セ消チーあわ雪)に^{||} 霞のしたは花そふりしく

(34オ)

・しの、めにおしみし袖の色も香も^{||} 軒には^{||} かへるやとの梅かえ

(34ウ)

・降雪に^{||} (見セ消チ)の春にしられてさく花の^{||} (見セ消チーに)ふゆこもりする谷の鶯

(34ウ)

・見わたせは霞まぬ空も^{||} (傍書ーのうちもイ)もなかり^{||} (見セ消チーかすみ)けり^{||} けふりた^{||} (見セ消チーな)ひくしほかまの浦

(36ウ)

・しら雪のかく^{||} (傍書ーか、イ)れる枝の梅かえに^{||} それともみえぬ春のよの月

(39ウ)

・あつさゆみ磯邊におふる松の花^{||} (見セ消チー葉は)はるもいく

しほ色まさるらん

(39ウ)

●吹をくるおほろ月よの春風に「梅か、のみそかすまさりけり」
見七消チーる (41オ)

●たつた川やまとはあれとから國と「傍書―あれともからあゐの」
いろいろにめわたり「傍書―そめわたす」はるの青柳 (43オ)

●あらち山谷のうくひす野へに出て「けふもやありて春をみるへき」
「見七消チーのあは雪」 (48オ)

●かすか山おひそふ藤はふたとせを「見七消チーの」春よりあき
も「見七消チー千世も」花そさくへき (48ウ)

●しら夢とたれなかむらんあしひきの「やまのかひあるやとの桜を」
そ「散しく」 (49オ)

●わたりふねそとしみえす朝ほらけ「みつのをかけて霞川かみ」
「見七消チー浪」 (49オ)

●わか「傍書―き歎」もこか袖ふる山のさくら花「むかしにかへる
春風そふく」 (50オ)

●心こそゆきてもおらめかつらきや「たかまのさくらにほふ」
「見七消チーひ」おこせよ (51オ)

●長家朝臣日吉哥会に「湖上霞」にほの海やおきつはる風ふかぬま
は「かすみを出ぬあまのつりふね」 (51ウ)

●かりかねのきえ行峯の夕霞「(52オ) またみもしらすふくあらし」
 (51ウ)

哉

●をのつからゆきてうらむる人もかな「傍書―なき」風のやとり
も花やさくらん (52ウ)

●かへるかりおほろ月よにさく花を「こし路の人にいかに」
「傍書―いか、」かたらん (53オ)

●たちかへりなをあふ坂に石間行「関のを川の浪の」
「見七消チー花の」しらなみ (53ウ)

●なかくめる「傍書―やる」雲のいく分「傍書―袖イ」をみこし路
の「空にきえ行春のかりかね」 (54ウ)

●山風もわたる川瀬の跡のなみ「しはしもみせず花の」
「見七消チーそ」散しく (58ウ)

●降雪にまたこもりえのはつせ山「ひはらの」
「見七消チー」もみえず花や落らし「ら」に右見七消チーら
「らし」に左傍書―らん (59オ)

●都人まつのいはりの藤のはな「雨さへ降てけふしほれつ、」
 (60オ)

●いさ、らはいね「見七消チーてイ」の里人山吹の「花色ころもく
れはかさねん」 (61オ)

●かきりあれは春こそくれめいまさらに「やとへかへるな鶯のこゑ」
 (61オ)

●春を「補入―お」しみあさ「傍書―ま」のかく山袖れぬ「あすは」
 (61オ)

うつきのころもほすらん〔見セ消チーとも〕 (62オ)

•ふるさとのちまちの早苗とる氏も〔傍書―田子イ〕御代のためとぞ猶いはふなる (62ウ)

•なきぬなりはや里なれよ時鳥〔見セ消チーうくひすの〕たにのすたちの山ほと、きす (63オ)

•五月雨の降〔見セ消チーすき〕にし空のほど、きす〕またゆふたちにこゑのこる哉〔傍書―なり〕 (64オ)

•あかなくにやすらへ空のほど、きす〕なつて〔見セ消チーく〕は、れるとしてもまれなり (66ウ)

•あやめ草ぬきや五月のたまかしは〕おなしみとりの軒のしら〔見セ消チー朝〕露 (68オ)

•なてしこの花色衣ぬれ〔見セ消チーき〕別〕たかあさ露のやとかこつらん (69ウ)

•夏の夜はすまの〔傍書―枚の〕ねくらのほど、きす〔傍書―ほともなくイ〕ねくねほとなき〔傍書―はかなき〕朝からす哉 (70ウ)

•五月きて袖やぬれそふ橋姫の〕さかめにまさる宇治の川なみ (72オ)

•夏山の木すゑの蝉も諸こゑの〕〔見セ消チーに〕ゆふくれかけてみや木ひく也 (73オ)

〔資料紹介〕実相院蔵『壬生二品集』

•袖ひちてむすふしら波立婦り〕こほるはかりの松のゆふ風〔傍書―かけイ〕 (74オ)

•雨降れとくるれともゆる夏虫を〕たれゆへつ、むころもての杜 (75オ)

•みしかよのまた雲とつるせきのとせ〔見セ消チーを〕とし〔見セ消チー鳥〕はまことのねにゆるすなり (75オ)

•みな月のでる日にまぐる草のはを〕 (76ウ) つれなくなりぬ秋の白露 (77オ)

以上のように、実相院蔵本にしか見られない表現の多くは、見せ消ちや傍書によつて校合が加えられている。ただ、これらの校合がどの段階で加えられたものか判断はしがたい。実相院蔵本の独自本文の中には、単純な誤写と考えられるものもある。しかし着目すべきは誤写とは考えられない、他の諸本には確認できない語句が、一部の本文や書き入れに見られることである。ここから、実相院蔵本は、流布していたものとは異なる本文をもとに書写されたと考えることができるとしてまた、一部の書き入れについては、これも流布していたものとは異なる本文を持つ伝本との交渉が予想される。

五 まとめ

久保田淳氏は、『壬二集』を、歌群単位の配列において、増減に

注目してA-Gの九系統に分類した。この中でF類は歌群の最も少ない伝本である。現在、これには天理図書館蔵乾元奥書写本、陽明文庫蔵六家集写本が確認されている。実相院蔵本はF類に属すると考えられるが、歌群単位の配列順序が天理図書館蔵乾元奥書写本や陽明文庫蔵六家集写本とは著しく異なっている。また、他系統においても、実相院蔵本の有する歌群単位の配列に限っては、一致するものはない。従って、実相院蔵本は単純にいずれかの抄出とは言えず、他系統が散逸した結果とも考えにくい。すなわち、実相院蔵本は極めて特異な伝本であると考えられる。

以上の報告にあたり、識者からの御斧正を賜わることができれば幸いである。

注

- ① 実相院蔵本『壬生二品集』の翻刻全文については、『実相院蔵古典籍調査報告集』第五輯、第六輯（二〇〇四年九月、二〇〇五年五月発行）を参照。
- ② 久保田淳「家隆家集の諸本とその伝来について」『藤原家隆集とその研究』、三弥井書店、一九六八年七月、五三〇～五四七頁。久保田淳「家隆とその家集」『國文學 解釈と教材の研究』、一九六五年一〇月。『國書総目録』と久保田氏の論文とは、掲載されている伝本の書名や、それを所蔵する図書館・文庫名の表記に微妙な差異があるため、書名や所蔵は久保田氏の論文の表記に従った。

〔付記〕

今回の報告にあたって、資料の内容を公表する御許可をいただいた実相院御門跡に、心からの謝意を表す。また、この資料を調査するにあたり、天理図書館、陽明文庫に特別の御配慮をいただき、貴重本の閲覧と複写を許可していただいた。記して謝意を表したい。

また、今回の報告に先立ち、『実相院蔵古典籍調査報告集』第五輯、第六輯所収の翻刻、及び所見について、松井律子氏と大取一馬氏からご意見をいただくことができた。改めて謝意を表したい。